

再生を促がし、散策しながら四季の自然に触れられるように整備してゆくものとする。

特に、この「里山」は、多目的な機能を有しているところから「みどりの創造」の一拠点として位置づけ、新しい意義を見出し、これを整備してゆくことに、強力な施策を展開していくものとする。

⑤ 「みどりの創造」においては、みどりがあるまとまりをもった面としてとらえることのみでなく、緑道、並木道、河辺林、さらに、一般道における沿道修景などを取り入れた「みどりのネットワークづくり」を促進するため、各種の施策と連携をとり、その実現に努めていくものとする。

⑥ 今後の環境行政の展開に当たっては、アメニティの確保についても十分配慮していかなければならない。特に、自然環境は、アメニティの構成要素として、極めて重要な位置を占めているところから「みどり」の量と質の確保並びにその空間的配置と「みどり」がもたらす景観についても、施策の主要課題として、これを取り上げていくものとする。このため、都市計画、農村計画、道路計画、森林計画などを担当する関係機関と緊密な連絡調整をとり、これを総合的に推進していくものとする。

⑦ 人間と自然とのかかわり合いを十分に理解することは、「みどりの創造」を推進するうえでの原点である。このため、自然についての学習、調査、研究、広報などに関する拠点としての「自然保護センター」の設立を推進するものとする。